



The Association of Liquid Filtration and Purification Industry

LFPI News Letter

Autumn 2004 No.29

継続は力なりを信じて



私は、水道のあり方の理想は、地域分散型の小規模水道であると信じています。一般的都市型水道即ち大規模な水道と、簡易水道レベル或いはそれより小さい飲用施設レベルの小規模水道

を比較する場合、考える人の立場にもよって夫々の優劣が挙げられています。特に小規模水道については管理が難しい、コスト高である等々、従来の“大きいことは良いことだ”の発想に近い批判（欠点）があげられてきました。しかしながら昨今のように膜浄水技術が発展し、遠隔操作可能でコンパクトなクローズドシステムの施設が可能になると上記の批判は当らなくなってきたと考えます。

一方、大規模水道施設の建設費の8割近くが管路敷設費であると聞いています。とすれば膜浄水設備の導入等で浄水施設が合理化されたとしても水道建設費は大幅には削減されません。又、現在、管路での水質低下を補う技術開発を目的の一つとして、厚生労働省主宰の“Epoch プロジェクト”が始まっているように折角、浄水場で上質な飲料水を製造しても長大な管路では水質低下が起きてしまいます。又さらに地震発生時には管路破断による断水の危険が広汎な地域に及ぶことも予想されます。

私どもの会社は数年来、膜浄水技術を活用して民間事業所の専用水道レベルの分散型小規模水道を地下水を原水として事業化し、これを導入された顧客の皆様的好评を得て拡大させて頂いています。水道

浄水技術には門外漢であった私どもがお客様からの要請を受けて、この分野に参入させていただき、事故も無く年々事業を拡大させてこられたのは、在来の浄水技術の上に来たものであり、技術を開発し続けてこられた水道浄水業界の先人の方々への感謝を多とするものですが、愚直なまでに安全でかつ顧客満足を社是として時には逆風に遭いながらも事業を続けてきた結果でもあると思っています。

私どもの会社では毎朝、短時間の朝礼を行い毎回、若い営業マンが交代で時事の寸評等5分程度のスピーチをしています。最初はぎこちなかったのですが、4月に入社した新人でも半年近く経った最近では、原稿無しで堂々と自分の言葉で話せるようになっていきます。

喩えはちょっと違うかもしれませんが、将に“継続は力なり”を実感しています。今後とも、“地下水膜ろ過システム”と名づけた地域分散型水道システムの専用水道への普及を続ける一方、技術の完成度をさらに向上させ、水道全般が地域分散型小規模水道に移行する為の嚆矢になりたいと考えています。

又、これを可能にする為に、膜分離技術のみならず液体清澄化技術の更なる革新を期待しています。

福田 章一

株式会社ウエルシイ 代表取締役会長

6月青年部会講座報告

「中小企業のための特許の戦略的活用方法」

「こんなに面白い講演会は是非またお願いしたい」

去る6月18日、ヨコハマプラザホテルにて、LFPI青年部会が初めて主催した講演会『中小企業のための特許の戦略的活用方法』は大盛況でした。

昨年11月に立ち上がったLFPI青年部会の第1回目になる講演会は、事前に資料を配布されていた段階では、『特許』、『情報開示』と



講座風景

書かれていて正直な話、若手ばかりの青年部会にとってはまだ縁遠い事柄ではないかと心配でした。しかし、話を聞くにつれて、青年部会の世代が今から準備する意味でも関わるが多くなりそうな内容であることに気がつきました。

思い起こせば、昨年12月の講演会でも『知的財産』がテーマに取り上げられ、中小企業にとっても『知的財産』はこれからさらに力を入れるべきテーマであり、その勉強の意味においても今回の講演会の狙いは合致していたと実感しました。

講師は社団法人発明協会神奈川県支部のご協力により、東海大学知的財産戦略本部のジェネラルマネージャーとして活躍されている國枝高羽（くにえだ・こう）先生が担当されました。



講師の國枝先生

國枝先生の講演は、その発せられる淀みない語り口に、参加者を「古典落語を聞いているようで楽しく拝聴できました」と惹きこみ、講演2時間、質疑応答1時間、トータル3時間という時間の長さをまったく感じさせなかった。

常識的な報奨金

先生は講演の中で最近の特許にまつわるエピソードとして、先日5月28日に国会を通過した特許法の一部改正や、

200億の請求で注目された高輝度青色LEDの裁判や人口甘味料の裁判など新聞報道でも取り上げられている職務発明に関する裁判にも触れた。裁判でも職務発明の対価には具体的なものさしを持っているわけではないので、会社ごとに会社側と労組側が納得できる規則を持つことを説明されていました。

國枝先生の話によれば、中小企業が持つ職務発明・知的財産を効果的に利用していくために行なうことがいくつかあるという。例の一つに職務発明に対する報奨金の見直しについて触れた。金額の大小は条件にもよるが、常識的に対応すれば社内的には研究部署から特許に関する訴訟を起こされることはなくなる。この「常識的」が國枝先生のお話のポイントであることは間違いないが、現実問題としてなかなか難しい。

中小企業の特許を守る「逃げ道のない特許明細書を作れ」

話を聞いて耳を疑うこともあった。大企業が中小企業の発明に対し、間接的な方法でノウハウを採りいれしようとしたケースを例に挙げ、警戒を呼びかけ会場の集中度が一気に増す場面もあった。

せっかく取得した特許であっても明細書が煮詰められていないために、大企業との裁判で負けるといった事例があるという。先生は時おり何度も「今回は明細書の書き方は説明しませんが」とおっしゃっていたので、次回はこのようなテーマで話してもらったら、また面白い講演が聞けるのではないかと楽しみにになり、自分なりに下調べをしておこうと思った。

「大企業」対「中小企業」といった構図の話が多かったわけではなく、大企業のマーケティング力に中小企業と大学の産学連携による研究開発力を「共同開発」というチームに発展させることで中小企業のためにもなるなど、使い方を間違わなければ特許は強い味方になることを説明されていた。正しく使うためには一企業でできる



真剣に先生の話メモする参加者

6月青年部会講座報告

こと、アドバイザーを活用することを見極めることが肝要であり、特許検索アドバイザーや大学の技術開発などを利用し、そこで得た技術・ノウハウを徹底して守ることも中小企業の生き延びる道だと説明され、まず身の回りを再確認する必要性を感じた。

今回の講演会に協賛された発明協会神奈川支部の方々に感謝しながら、青年部会第1回目の講演会は盛況の内に幕を閉じた。これもひとえに幹事のリードによるものと思い、いたく感謝し、次回の講演を心待ちにし、結びとしたい。

＜神奈川機器工業(株) 糸 慎一＞

懇親会レポート

國枝先生の話聞きながら思いを寄せる中、無事青年部会初の講演会が終了しました。

その後は待ちにまった懇親会です！ 前回出席者4名

だけであとは新しい顔ぶれにて遠慮をしながら席につきました。

幹事より急遽乾杯の指名を受け多少とまどいましたが、一言述べて乾杯をし



懇親会風景

終わると皆のリラックスする姿がようやくでて、各テーブルで意見交換が始まりました。

弊社も今回若手営業マンが初参加にて一緒に情報交換にて話をしていたのですが、新しい情報に話が進み、訪問約束までする運びになっていました。いつもとは違った形で営業が展開できるというのはこの会のメリットでもあるので皆がどんどん活用できればと思います。

今回新規参加者が多かったのですが、やはり関東の人が多く私共関西企業はまだまだ少なくこれからもっと活性化しなくてはいけない！と考えていたら、話の中で「次は関西でしましょう」という意見がでて、その場で決定！となりました。これによりまた新たな人との出会いになれば素晴らしいことです。

あっという間の懇親会でしたが、幹事さんに感謝すると共に次回皆様にまた会えるのを楽しみにしております。

＜東洋スクリーン工業(株) 阿部 昌明＞

LFPI 出版事業

LFPIの出版事業としてはろ過部会プレフィルター分科会の参加会員を中心にして作成した実用書「ユーザーのためのフィルターガイドブック-糸巻き・不織布編-」を9月に出版し、LFPI会員に1冊配布したのが最初である。今後の出版事業として以下のことを予定している。

(1) ユーザーのためのガイドブックシリーズ

ユーザーのためのガイドブックは専門書ではなく、ユーザーがLFPI会員企業の取扱っている清澄化技術や機器を使用するにあたり、それらの基本原理や特徴を理解し、選択基準、試験法・評価法、使用にあたっての注意点等を知ってもらうための実用書と位置付けている。そのため、内容の記述はメーカー色を無くし、一般の人が読んでもわかるように配慮している。また、このガイドブックは営業活動のツールあるいは社員研修の教材としても利用してもらうことを期待している。今後は以下のタイトルのガイドブックを発刊したいと考えている。

①金属フィルター・スクリーン等編、②精密ろ過膜・限外ろ過膜等編、③粒状・特殊ろ材ろ過等、④脱水ろ過機器、⑤遠心(ろ過)分離機、⑥イオン交換樹脂・吸着剤、⑦ポンプ・弁・配管材等、⑧ろ過助材、水処理剤等、⑨サニタリー技術、⑩計測・制御機器などである。(これらのタイトルは暫定案である。)

ユーザーのためのガイドブックは基本的にはその機器を取扱っているメーカーが中心となって内容を企画検討し、執筆するものであるため、タイトル等を含めガイドブックに関する要望をお寄せ下さい。

(2) 液体清澄化技術基礎実験書

過去4年間に6回の液体清澄化技術に関する基礎実験講座を開催し、15テーマ以上の単位操作実験等を行ってきた。各実験テーマのテキストは担当者が土曜日に集まり、4～6回かけて全員で原稿を推敲して作製した労作である。そこで集大成として、これまで実施したテーマの実験内容と基礎実験に必要な各種の要素技術を1冊の本まとめべく「液体清澄化技術基礎実験書」の作成を過去の実験担当者10数人が土曜日に集まって行っている。

本書の構成は①清澄化技術の基礎理論(原理)と選定法、②実験前の準備、液体を取扱うための留意事項、技術選定のための予備実験、実験における計測と制御など、③単位操作実験(15～20テーマ)、④清澄化技術の事例集(ラボから実装置への流れ)等である。本書は来年末までの完成を目指しているが、完成後はできれば一般書店で販売すると共に、基礎実験講座でも利用する予定である。

＜LFPI代表幹事 松本幹治＞

第6回基礎実験講座報告「窒素・リン規制に対応する処理技術を学ぶ」

総括報告

— 処理技術の基礎を学ぶ —

去る9月3日(金)、深い緑のキャンパスの中、まだ暑さの残る横浜国立大学において、第6回清澄化技術基礎実験講座が開催された。第6回目のテーマは「窒素・リン規制に対応する処理技術を学ぶ」で、近年の窒素・リン規制の拡大に対応した除去技術について、その基礎を学ぼうというのが趣旨であった。参加者は、水処理プラントメーカー、エンジニアリング会社、水処理機械メーカーそしてユーザーをまじえた色々な分野の12社15名で、日ごろ、研究開発などに従事する少数精鋭の若手の方々でした。

実験講座は講義室における松本教授、新田見助手よりの窒素・リン処理技術についての講義より始まり、実験を担当する講師3名による各実験の説明に引き続き、自己紹介を経て実験室へ移動、午前中に1回目が、午後2回目に3回の実験が行われた。一つの実験に対し2班5名が参加し、さらにその中で2～3名で一つのテストを行うことが出来たため、講師と一体感になった実験が行われ、参加者全員の熱心さと共に我々バックアップするものにとっても今までの準備の苦労が報われる感じがした。

今回のテーマは4月の技術委員会で決定され、月に一度、土曜日に担当講師と今までの実験の講師を経験なさった方をアドバイザーとしてお集まりいただくこと計4回、さらに担当講師の方には自主的に予備実験を行っていただくなど、多大な時間を費やして実験講座本番に備えた。

第6回目の狙いとしては、従来のほとんどが2日を費やし、行っていた実験講座でテーマを絞り、内容の吟味を行って、参加者、講師双方の負担を軽減し、1日に集約して近隣の方は日帰りで参加出来るようにした。また、従来の基礎実験講座では単一操作方法の実験が主であったが、今回は処理対象を持つ実験であったことである。

実験テーマは「凝集法によりリンの除去」「晶析法による脱リン」「脱気法によるアンモニアの除去」の3題であり、きわめて基礎的なこととはいえ、応用することにより実装置への理解も深まり、さらには実機的设计まで持つて行くことが出来る可能性がある点では、当会の基礎実験講座の意味合いは深い。

最後に、今回の実験講座の準備・実行をしていただいた講師、アドバイザーの皆様と実験場所及びスタッフの提供などを行っていただいた横浜国立大学松本研究室の皆様方にお礼を申し上げたい。

<(株)トーケミ 佐藤 廣>



講義風景

「凝集法によるリンの除去」

リン化合物は湖沼や閉鎖性水域における富栄養化の原因物質の一つとされており、早くからその除去技術の研究開発が行われている。このリンの除去技術に関し様々の知識・経験を得るということは化学業界に身を置く者は勿論のこと、各種業界の技術者等にとって非常に重要なことであり、今回、清澄化技術基礎実験講座において理論的・実験的な側面から様々な知識・経験を得る機会が与えられたことに深く感謝したいと思います。

さて、本講座では、座学により基礎知識を習得した後実験が行なわれ、詳しくは、凝集法によるリンの除去と題し、リンの除去特性に与える凝集剤(PAC、ポリ硫酸第二鉄)、pH、共存物質の影響について実験が行なわれました。内容は基礎的なものとのことでしたが、本



実験担当講師の
中村先生(横浜国大)

除去技術の知識・経験に乏しい私にとっては非常に意義深いものとなりました。また、本講座ではレポートの提出が求められ、実験データの整理、実験的・理論的な解析といった一連の基本的な作業を行なうことで改めて基本を見直し、私のような若輩者ばかりでなく、通常業務としてリンの除去技術に携わっている方々にも貴重な経験になったのではないかと思います。実験は2～3名の班単位で行なわれましたが、大人数では傍観者になりがちになり、1人では個々の力量によって進捗に差が出てしまうことから、班人数についても相互に協力し合せて刺激を受けるに適切なものであったと思います。特に私に関してはパートナーの方(江守商事株)栗山氏に恵まれ、実験操作、得られたデータの捕らえ方等、刺激を受けることが多く、この点においても非常に意義の大きいものとなりました。今後もこのような機会がありましたら是非参加させて頂きたいと思います。

最後に本講座を通して御教授頂きまし



凝集法による実験風景

第6回基礎実験講座報告「窒素・リン規制に対応する処理技術を学ぶ」

た横浜国立大学の松本先生および日本液体清澄化技術工業会の講師ならびに関係者の皆様に深く御礼を申し上げて報告とさせていただきます。

＜メルテックス(株) 木村 薫＞

実験2 晶析法によるリンの除去



実験担当講師の
澤田氏(栗田工業)

平成16年9月3日に横浜国立大学にて“窒素・リン規制に対応する処理技術を学ぶ”基礎実験講座が開催されました。まず始めに松本先生による約1時間の講義が行なわれました。とても速いスピードでアツという間に終わってしまったので概略的な内容を掴むのが精一杯でした。講義終了後、グループに分かれ実験が始まりました。実験テーマは1.凝集法によるリンの除去、2.晶析法によるリンの除去、3.アンモニアストリッピング法による窒素の除去でした。学生時代、水処理とは直接関わりのない分野を勉強していたので、どのテーマもとても新鮮でした。今回行った実験のうち晶析法によるリンの除去は、ヒドロキシアパタイトを種晶(種結晶)に用いてリン酸イオンをリン酸カルシウムとして不溶化させる方法を用いたものでした。実験では種晶が無ければ結晶が析出しない準安定域における1.pHの影響、2.カルシウム濃度の影響、3.アルカリ度の影響を調べました。実験の結果から、pH、カルシウム濃度が高いほど晶析が進みリンの除去率は高くなり、逆に



晶析法による実験風景

アルカリ度が上がると晶析が阻害され除去率が低下することがわかりました。どの実験でもハッキリとした差を見ることができ、それぞれの影響をよく理解することができました。昨年までは2日間で行われていたものを1日で行ったということもあり、休む間もない感じで進みましたが、講師の方々の綿密な準備のおかげでとても効率よく行うことができ、非常に密度の濃い講座を受けられました。実験終了後に開かれた交流会では、他の実験グループの方々とも言葉を交わすことができ、社外の方とのつながりを得ることができ、さらに充実した一日になったと感じました。今後もこのような機会があればぜひ参加させていただきたいと思います。最後に、このような場を設けていただきました松本先生、並びに各講師の方々に深く御礼を申し上げます。

＜(株)石垣 玉内 亮介＞

実験3 アンモニアストリッピング法による窒素の除去



実験担当講師の
八木氏(日立プラント建設)

窒素除去には①生物学的脱窒素法②アンモニアストリッピング法③不連続点塩素処理法④イオン交換法等が一般的に普及している。

本講では、建設費および運転費が比較的安価で、数千mg/Lの高濃度処理に適するアンモニアストリッピング法を例にとり、窒素除去の基礎実験を体験した。

同法は、気液接触塔に空気を送り、高PH域で、大気中のアンモニア分圧に応じてNH₃を大気中に放散する。

[主要な知見] 純水1L、NH₃濃度500mg/Lに対し、

1) 空気10L/min、PH7→12により、除去率50%到達の所要時間は25%低減。60分後の平衡点ではPHの影響なく、除去率70%。

2) 空気15L/min、PH11では、除去速度20%向上。

実験では、窒素含有率が比較的low濃度でもあり、一般の文献値除去率60~95%に対して、低い除去率となった。また本法は対象がNH₄-Nに限



脱気法による実験風景

られ、NO₂-N、NO₃-Nは除去不能であり、アンモニアガスの大気汚染という二次公害防止の問題もある。

実務においては、これらの諸特性を評価しつつ、経済的な手法を選択することが肝要であると思われる。

講習会に若手を派遣する立場から、技術習得に加え本講の生の実態を把握すべく参加させていただいた。

講師各位の熱意ある指導と丁寧な講座運営を十分に把握できた。同基礎講座の継続と応用に向けての益々のご発展を祈念し、お礼の言葉といたします。

＜日本電工(株) 大塚 純一＞



懇親会風景

新製品／主力製品紹介

このコーナーは名簿順に掲載する予定でありますが、新製品開発がタイムリーな時期にあたる会員企業は優先的に掲載を検討致しますので広報委員・富士フィルター工業(株)ト部宛ご連絡下さい。

(E-mail : urabe@fujifilter.co.jp)

(株)クラレ製小型UFモジュール「キャラクター®」



〈製品概要〉株式会社クラレ製小型UF中空糸膜モジュール「キャラクター®」シリーズは、小型純水製造装置や無菌水製造装置の主要フィルターとして販売を開始以来、改良を重ねながら、高性能と使いやすさを追求し、20年が経過しました。工業分野、医療分野に限らず、幅広い領域での精製ろ過のニーズに対応します。

〈特徴・仕様〉

- 高性能で、しかも使いやすさを追求：従来のMF（精密ろ過）と同様の使いながら分離特性が格段に高いUF（限外ろ過）の性能が得られます。
- 省スペースのインライン取り付け型：既設の配管ラインに直接取付可能なので、特別な装置やスペースは不要です。
- *「キャラクター®S」は膜面積が2m²のエレメント、ハウジング一体型モジュールです。
- *「キャラクター®C」シリーズは膜面積が4m²のカートリッジ方式で、分離特性の異なる2種類の中空糸を揃えています。

常磐株式会社 高機能商品部

〒550-0002 大阪市西区江戸堀 3-1-25
TEL (06) 6443-0361 FAX (06) 6443-0400
URL：作成中

研磨排水処理用セラミック膜装置

〈製品概要〉シリコンウェハの研磨工程で排出される微細な粒子を含む排水処理に、セラミック膜の濾過装置を数多く納入しています。排水中の粒子が非常に硬く、更にフリーの水素が含まれるため有機膜の寿命が短くなってしまい、工程上問題となっていました。弊社では、



これらの諸問題を一挙に解決すべく、セラミック膜を提案してまいりました。膜寿命で10年をはるかに越えて現在でも安定稼働している装置があります。

〈特徴・仕様〉

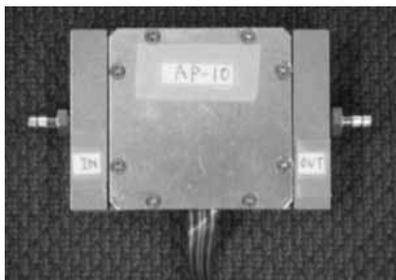
- 世界中で最も実績のあるセラミック膜をご提供。
- 膜種類もNF,UF,MFと各種取り揃えています。
- 優れた設計思想により1年間以上ノーメンテの装置を製作しています。
- 長年の実績を基に豊富なデータベースを構築していますので、あらゆる領域の濾過に対応出来ます。

株式会社トライテック

〒140-0004 東京都品川区南品川 2-2-5
TEL (03) 5479-4791 FAX (03) 5479-4793
URL：http://www.tritec-n.co.jp

圧電ポンプ

〈製品概要〉従来にない小型／薄型で、微量の送液が可能なポンプです。圧電セラミックス板を2枚を接合し、一方が伸び、他方が縮むように電圧を印加する事で変位が生じる事を利用したアクチュエータを駆動源としています。



特に粘度が低い液体を送液する医療／バイオ分野・化学分析分野への応用が出来ると考えています。

〈特徴・仕様〉

- 小型・薄型・軽量：圧電体を使用したアクチュエータとポンプ部が一体化。
- 長寿命・低騒音：従来のポンプのようなモーターや軸などの、摺動部がありません。
- 低消費電力・低ノイズ：駆動源が圧電素子である為、消費電力が極めて少なく、電磁ノイズの発生もありません。
- 高吐出圧力・微量精密吐出：吐出量は印加電圧に比例します。また周波数を変えることによる調節もできます。さらに、吐出側を絞ってもモーターポンプのような焼付けの心配がありません。
- 外形寸法：L60 × W40 × H12、140g

株式会社ニシヤマ

東京都大田区大森北 4-11-11
TEL (03) 5767-4422 FAX (03) 5767-4438
URL：http://www.nishiyama.co.jp

企業紹介

ニッタ株式会社

当社は日本初の伝動用ベルトを製造して以来、伝動・搬送用製品メーカーとして業界をリードしてきました。

現在は事業の多角化に伴いベルトメーカーの枠を超えて、空調製品、建設資材、メカトロ製品、圧力・力覚センサーなどを扱う事業部を持ち、市場の様々なニーズにお応えしながら各方面に対してシーズ提案をしております。各事業部とも高い専門性を持ちながら、互いに有機的にリンクすることによりそれぞれが単体では成しえない成長をしています。

本会にてお世話になります産業資材事業部では、クリーンルーム用エアフィルタシステムや手術室用フィルタ、コンピュータや美術品を腐食性ガスから守るガス吸着用フィルタなど様々な用途の高性能フィルタと、清浄度管理のための微粒子・ケミカル汚染測定機器などを製造・販売しており、液体清澄化関連商品としましては、半導体デバイス工場などで使用される超純水や薬液中の微粒子測定システムを提供しています。

今後とも様々な事業を通じ、広く社会に貢献してまいりたいと考えております。

<池田 卓司>

株式会社日本海水

当社は、グループ会社の新日本ソルト(株) 赤穂海水(株)を統合し本年10月1日に誕生した「人と海(水)を技術でつなぎ”食と健康、そして人びとのよりよい生活に貢献する。」を基本理念にする国内最大の総合製塩メーカーです。

当社は、業務用から家庭用塩まで幅広く事業展開している「食用塩の事業部門」と並び排煙脱硫用等の水酸化マグネシウム及び各種水処理用吸着剤の製造・販売している「環境事業部門」が大きな柱になっています。

本会でお世話になります水処理用吸着剤「リードエフ」は、水中に含まれるフッ素、ヒ酸・亜ヒ酸、ホウ酸、リン酸等のイオンに対して高い選択性を有する高性能吸着剤として各分野でご利用頂いており、対象イオン種別にヒ素用、フッ素用、ホウ素用、リン酸用の4種類を上市しております。又、国連の機関であるUNIDOが実施するプロジェクトにおいて当社の技術が採用されるなど海外においても高い評価を頂いております。

当社は今後とも、お客様の用途に合った商品を提供できるよう鋭意研究開発を進め社会貢献企業として努力して参ります。

<四元 利夫>

廣川産業・技術研究所

1987年に東洋エンジニアリング(株)の子会社(株)プロテックスに移籍して、技術コンサルティングを事業化しました。中小企業をターゲットにしたのですが、受注が安定しませんでした。

会社としての事業を諦めて、1993年の定年と共に、個人として自由業を開始しました。わが国では、専門の新技術開発やケミカルエンジニアリングなどの業務がないことが分かっていたので、別の分野に進出しました。即ち、①地方自治体の設備貸与や設備近代化資金などの融資のための経営診断・指導、②中国・韓国での新技術開発とその工業化・プロセス改善・環境定策などの指導、③労働安全の診断・指導、④ISO14001などの構築指導・審査、⑤電気・機械関連の避雷管・研磨加工・精密研削加工などのコストダウン・品質改善の指導などです。最近温泉の循環式浴槽のレジオネラ菌とろ過器対策の投稿と講演をしたのですが、当会による特集号のお世話になりましたので、お礼を申し上げます。

個人としての活動と共にグループとしての活動もあり、著書出版(燃焼、微粒子、界面・表面)、雑誌への投稿と講演(環境一般と共に循環型社会向けの廃棄物・リサイクル対策など)、中小企業生き残り発展策など何でも断らないように引き受けています。

現在は生涯現役を目的に、新しい取り引き先の開拓や新しい資格取得・資格分野拡大をしたりしていますので、御願ひ致します。

<廣川 一男>

オリエンタル酵母工業株式会社

当社は昭和4年にわが国最初の製パン用イーストメーカーとして創業し、現在ではイーストをはじめとするフラワーペースト(パン用クリーム)、マヨネーズ等の各種食品素材を業務用として提供しておりますがその他に、実験動物及び養魚用飼料、さらにバイオ分野では診断薬用原料や研究用試薬の提供、安全性及び薬理薬効試験等の受託業務も展開しております。

イーストでは主要原料より必要な糖分を取り出すために清澄し栄養源として使用していますが、これを使って培養したイーストもその液とは分離して製品化しております。

バイオ分野でも有用な固形分あるいは液体分の分離清澄は欠かせない技術であり、液体清澄化技術を生産活動の随所に利用しております。

これからも無限の可能性を秘めた「酵母」を事業の原点として「技術立社」を目指し、人々の生命と健康を支える新たな成否と技術開発に挑戦してまいります。

<水籐 彰則>

編集後記

さて、今月は2004年シンポジウム開催の月となりました。4年前、第1回目となった2000年記念シンポジウムはシドニーオリンピックの年でした。その会場で4年毎のオリンピックの年に合わせて大規模なシンポジウムが開催出来るよう計画をしていきたいと思いますという話がありました。その計画を実現すべく昨年からのシンポジウム実行委員会により着々と準備が進められ、この10月を迎えた訳です。

LFPIは年間を通じて、講演会、講習会、見学会、視察、交流会など様々な企画を実現しておりますが、会員各社の参加率という点ではかなり限られた(偏った)傾向にあると思います。

会というものは委員会や行事などに何らかの形で参加しない限りその本質や魅力を理解する事は難しいのではないかと感じております。

本ニュースレターも来年の1月号で30号となりますが、年間4回発行している訳ですから7年以上になります。その間、広報委員会のメンバーが年間の計画を練り、毎号内容をアレンジしながら担当者が原稿依頼を行っております。これは言わば手弁当での仕事です。他の委員会や部会・分科会にも同様の事が言えます。委員会や部会によっては土曜日に検討会議を開く事も珍しい事ではありません。しかし、こうした事を可能にさせている要因の1つは、あるテーマ(場合によっては複数のテーマ)を実行する為に他社のメンバーと時間を共有しつつ得る事ができる様々な知識や経験への魅力。又、それぞれの情報を交換する中で(時には飲み)互いに協力して会をさらに良いものにして行こうという意識があるからだと思えます。

会社で得ることの出来ない情報や人脈は広く社会に求める事で広がっていくものだということも身をもって感じております。

今まで行事や委員会に参加する機会が少なかった会員におかれましては、今後是非とも何らかの形で会に参加することで、その魅力を知る機会を作っていただきたいと考えます。

ともあれ10月7日、8日の日程で開催されます、2004年シンポジウムは是非とも成功させて参りたいと思っております。会員各位のご協力を改めてお願いいたします。

<広報委員 卜部 兼好>

編集/発行:日本液体清澄化技術工業会 広報委員会
住所:〒194-0032 東京都町田市本町田2087-14
TEL(042)720-4402 FAX(042)710-9176
LFPIホームページ <http://www.lfpi.org>